

甲陽だより

走って良かった

甲陽学院同窓会会長
原 清

つい先日、テレビで古いアメリカ映画を観ていた私の娘が、思わず叫んだ「あら、あのスカートの流行、いまと全く同じだわ」。

この映画は一九五九年作、今からちょうど二十前のアメリカの名作「旅情」だったが、主演女優カザリーン・ヘップバーンが身につけているスカートが、びたり、いま流行のロングスカート。二十年前の流行が、いま再び繰りかえされようとしているのである。流行はくり返す、歴史はくり返えずというが、まさに社会情勢もくり返えしつつ進んでいるのである。たとえば、私が甲陽中学に在学した五年間（大正十年から十五年まで）をふり返って見ても、大正十年には川崎、三菱両造船所に史上空前のストライキが起り、参加総員三万人。この動員数は戦前の最高記録といわれた。今春の春闘の人数とは比すべくもないが、当時も同じ物価高に苦しむ工員たちが増給を要求してストライキ、デモとなり、ついに軍隊が出動する騒ぎとなった。流行歌も社会不安を映して「枯れすすき」や「船頭小唄」など。大正十四年には東京、大阪、名古屋の三都市にNHKラジオが放送開始、たちまち東京十三万、大阪五万という受信契約者が出た。またスピード好みはいつの世も同じ、今や欧米主要国とはダイヤル通話さえ出

来る時代だが、大正十五年にはやっと日本本土と北海道間に電話開通。今ならジェット機で、東京・ローマ間十数時間だが、大正十四年、朝日新聞社訪欧飛行の初風、東風の二機は、立川飛行場を出発してから三カ月かかって、やっとローマにたどりついた。

森羅萬象、くり返えしつつ進歩してゆくのは結構だが、戦争や病氣や飢饉のくり返えしただけは、お互いにご免こうむりたい。

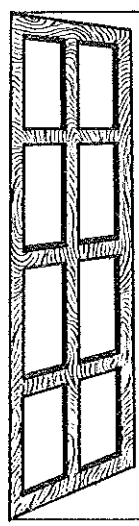
同窓会で久しぶりに逢った友だちも同志が、まづ口をついて出る言葉は「よお、元氣そうだな」である。人生を歩きつづけた道のりの多い人ほど健康に關心が深い。健康法の披露

発行所
百官市甲子園高瀬町3番7号
甲陽学院同窓会
電話百官(0798)41-0622番0623番
郵 便 局 番 号 6 6 3
刷 集 原 原 清
印刷所
株式会社印刷石川
神戸市兵庫区中道通3丁目3-6
電話神戸(078)575-3765(代)

第 55 回 同 窓 会

8月25日(日) 3:00
於 甲陽学院高校

運動場にゲームとパーティを
行ないます。飲み放題食べ
放題、家族・女性同伴歓迎!!



や保健特効薬の噂話など、同窓の集いはほとんど大部分を、この雑談に過ごしてしまいう人も多いようだ。

さて私自身、中学時代から今、目までの永い年月、一日といえども病臥しることがない。もちろん入院生活も、盲腸手術の経験さえもない。ある人に言わせると、無病息災よりも一病息災の方が安全性が高い。一つの病氣をもっているとき常に身体に氣をつけているが、無病息災、病氣の経験が全くないと、つい無理を重ねるから手遅れになる場合がある。というのだが、私は、やっぱり一病より無病に優るものはないと信じている。では、何が私の健康を支えているのだろうか。自分なりに観察して私は次の二つの要因をあげたい。

第一は中学時代に脚の鍛練に徹したこと。私は山岳部のメンバーでもあり日曜毎に各方面へ遠足した(今の言葉でいうならハイキングからワンダーフォーゲル)。引卒者は図画の榎谷先生だった。ゆく先

々でスケッチの描き方も教えてもらった。楽しい徒歩旅行だった。しかし、それにも増して、私の脚が鍛えられたのは、汽車通学のお蔭だった。もちろん大正十年ころは阪神電車に甲子園駅はなく、甲陽中学生のほとんどは今津駅(今の久寿川駅)で下車して登校していた。しかし私は当時、神戸から汽車で通学

していた。阪神電車の通学定期券にくらべて、汽車の通学定期券は三分の一くらの値段だったからでもある。その代り、西宮駅から学校まで約四キロは歩かねばならぬ宮崎から重いカバンを肩から下げて、ゲートル巻いた脚で、さっさと歩いても四十分はかかった。

甲陽学院同窓会 夏季大会御案内

- 一、日時 八月二十五日(日) 午後三時から
 - 一、場所 母校 甲陽学院高等学校 運動場
 - 一、会費 一般 千円。学生 五百円。ただし、特別会員及び今年春入会の新会員は招待。
 - 一、申込 準備の都合もありますので、なるべく早目に、同封振替用紙で年会費も併せて申込み御送金してください。
- なお、今年とは趣向を変えて、新卒会員が中心となって次のような企画で行なう予定です。
- 1、運動場にテントを張り席を設ける。
 - 2、全員参加できる小運動会。
 - 3、模擬店を開き、飲み放題、食い放題。
 - 4、有名人(会員外を含む)による司会、講演。
- ご家族ご同伴も歓迎いたしますので、例年に増して賑々しくご参加くださいませよう、御案内申しあげます。
- 昭和四十九年七月
- 甲陽学院 同窓会
- た。往復八キロ、相当な運動量であり、雨風の日、炎暑の日は、とくにひどかった。おまけに汽車の発着時刻は、登下校時刻とは無関係に、約一時間おきに一本しかなかったから、いきおい、駅と学校の間は連日のように駆け足だった。一年生のときは上級生につい

て走ることがやつとだった、五年生ころになると脚力に自信も出来て、往復八キロの田舎道を、いき切れ一つせずに走りっぱなしが平気になっていた。

次いで新聞社から放送会社に向向。ここでは新聞社以上に若い、発掘とした男女が働いている。新聞社時代には締切時間の一分、二

会員名簿整理についてのお願い

年二回会員の皆様に発送しています、「甲陽だより」が毎回百数十名住所変更のために返戻されて来ます。考えて見れば郵税だけでも馬鹿になりません。お願いです、住所の変更は是非下さい。当方も百万手をつくして整理していますが本人よりのものが一番正確です。是非実行して戴きたいと存じます。

- 「甲陽だより」第十九号返戻された人名、
- 第二回 小島俊二、中里勝雄
- 第四回 櫻尾 茂
- 第五回 若林孝三郎
- 第六回 藪常夫、大橋保次
- 第八回 高橋潤三
- 第九回 田中七兵衛
- 第十回 宇野忠男、阪東督三
- 第十一回 松井真佐雄、原 孝司
- 第十二回 清水三郎、久米正幸
- 第十六回 永木 清
- 第十七回 森本 浩、本田恵海、清田 稔
- 第十八回 梶原 博、須山徳二、高田光夫
- 第十九回 山下留吉、岡内正雄、古山 治
- 北村 広、中本光雄
- 第二十回 高島 惇
- 第二十一回 萩原恒男、浜 純、井上 明
- 佐々木俊郎、森田芳男、古江正一、藤井 保、原 実
- 第二十二回 白岡 保、村井 宏、新家高明
- 石関相助、鈴木 明
- 第二十三回 飯尾寛吉、小松英一、重村郁夫
- 塩入章夫

分を争っていたが、放送会社では一秒、二秒が勝負である。相手はナマの人間対話であり、若いタレントとの対決である。気も若くなる。自分の年令など忘れてしまふ。当世流行の念力など無用。常に考え、常に行動する。……こんな環境が、病魔を追払い無病息災を招くのではないだろうか。

- 第二十四回 加藤久夫、瀬尾伊智夫
- 第二十五回 波々伯部繁、木村須賀男、長瀬 亘、細野堯正
- 第二十七回 傍島克治、大工昭三郎、黒川慶 昭
- 第二十八回 水川 智
- 第三十回 中原一成
- 第三十一回 藤原 博、安達孝三
- 第三十二回 上野 保、藤田道男
- 第三十三回 野田 実、小野一郎、八木昭夫
- 土屋 廉
- 第三十四回 沢田専治、柴田俊美
- 第三十五回 早川 博、大坪 孟、矢田 健
- 浜田康熙、峯 博
- 第三十六回 新家康宏、田辺幸延、松本行弘
- 第三十七回 細野嘉昭、藤原義治、吉井忠彦
- 溝淵幸雄
- 第三十八回 小嶋好人、岡 哲也、西村亮一
- 第三十九回 山本拓郎、松本 浩、福田治郎
- 加輪上敏彦、菅野 満、井上 潔
- 第四十回 岩谷 竜、行平 忠、島住総二
- 前田忠治、関 清三
- 第四十一回 難波康熙、吉井秀雄、倉谷 宏
- 竹安 清、南雲徳一、佐藤恒武、成瀬晃三
- 第四十二回 和久昌史、稲野昌夫、福井 厚
- 岩永道雄、川内秀人、戸田郭也
- 第四十三回 宮井正三郎、藤原 透、平岡紘一、尾崎郁也、長峯治男
- 第四十四回 住友博之、林 靖雄、豊下梢彦
- 倉谷 泉、芦川 洋

- 第四十五回 沼津昌治、山本敏雄、広町勝治
- 第四十七回 山崎芳郎、成藤広之、田中基博
- 岸本明住、大前敏一、井関憲二
- 第四十八回 山崎 要、佐久間一、小林謙一
- 猪子洋二
- 第四十九回 尼寺久志、中川一幸、小林敏郎
- 聰貴賢一郎、柏谷健二
- 第五十回 長尾 健、朝日山登、渋谷隆司
- 茂田広守、佐藤 徹、日下部雅行、大住一 仁
- 第五十一回 小川卯太郎、上田高広
- 第五十二回 仙 治哉、天野實彦、神宮寺要
- 第五十三回 和田哲哉、堀部陽人、馬淵敏彦
- 斎藤裕己、喜多哲也
- 第五十四回 田麻 修、川口浩二、池田 滋
- 高商第一回 北村 広、高坂 毅、末尾 稔
- 第二回 岡村直矩、高島 惇
- 第三回 安西信夫、北村修三、中條邦夫
- 第四回 大島健三、兵藤了三、山脇義明

随 想

サッカーとのめぐり合い

水野 隆

中村先生から「甲陽のサッカーについて、何か想い出の原稿を」との電話を受けたとき快くお引受けしたときの私の気持は、自分のサッカーの想い出と言うよりは、今日までサッカーの魅力、いや魔力にとりつかれて来た自分の人生にとってサッカーとのめぐり合いの場が甲陽であったという「なつかしさ」に他ならない。

戦後の荒廃の中で復活した中学校生活でのクラブ活動は、今日、考えるようななはなやかなものでも、カッコいいものでもなく、ましてや、サッカーなどは一般人にとっても、また学校の中学生ですら極めて関心のうすい存在だったし、他人に「サッカー」について説明するときも、その認識の低さに情けなく思うことがしばしばあった。恐らく空腹をこらえながら「つぎはぎだらけ」のボールを「破れたシューズ」で蹴り合う風景は、他人の目には異様でしかなかったらう。勿論、蹴っているわれわれ本人たちにとってはそうした毎日が、結構たのしいものであり、また夢もあつた。

(追記)

中村先生とこの原稿の約束をした数日後、私は不覚にも背椎分離症という診断を受けて入院させられる羽目となりました。この原稿はその病院のベッドで、約束の期限ぎりぎりにペンをとった次第です。悪しからず。甲陽の現役、O・Bの皆さんのご活躍をお祈りします。(旧姓徳弘 第二十八回準卒)

水野隆氏は関学時代全日本入りされ、八年間杉山以前のレフトウィングとして数々の国際試合に活躍されました。現役引退後もドイツでクラマー氏に師事、現在名古屋地区担当の日本蹴球協会技術指導委員で御活躍中です。(編集者注)

総 会 報 告

昨年度の事業報告と決算の承認、今年度の事業計画と予算の審議を主要議題として、理事会と総会が去る三月二十五日、母校の高校で開かれました。年度末で各方面とも多忙の時期でしたが、原会長以下、約四十名の理事、委員の御出席の下に、六時から約二時間半、熱心な討議が行われました。

(一) 四十八年度事業報告

1 主要行事日誌

48年4月 理事会並に総会開催。概要は「甲陽便り」第18号に記載。

7月 「甲陽便り」第18号印刷、発行。夏季大会案内、年会費等の納入用紙同封。

8月 夏季大会実施。(会場) 高校講堂及び食堂(出席者) 百二十人、概要は19号に記載。

9月 「甲陽便り」第19号印刷、発行。卒業式に当り、新入会員に「甲陽便り」第19号を配布すると共に、ケース入り認印を記念品として贈る。

3月 後輩在校生に、スポーツ試合応援用の横書きと応援旗を寄贈。理事会並に総会開催。

2 同窓会関係の事務担当者についてこれまでにいろいろ御世話頂いておりました川口氏は六月に辞任される予定でありましたが、後任がありませんので年度一杯留任を依頼致しました。なお前常務理事の合田氏にも顧問理事として週一回来校をお願いしました。川口氏の後任としては前書記の新山氏をお願いして去る二月に事務引継ぎをして頂きました。なお、同窓会関係の事務は、年会費大会費の処理を中心とする会計面と「甲陽便り」の発行、名簿の更新、諸会合の準備等の庶務面の二部面にわたって、かなりの量になります。

(二) 次期役員を選任
次期役員につきましては、理事会並びに総会出席者、期せずして全員一致、現在の原会長、友国・高垣・藤井・桑田各副会長、期常

任監事の留任をお願いすることになりました。幸い各役員とも御出席しておられましたので、その場で御本人の承諾を得ることができました。

(二) 四十九年度事業計画

1 「甲陽便り」年二回発行。興味を増すために紙面の多彩、充実化をはかりたい。編集の実務については一定の枠をこえる訳にはゆきませんが、その範囲で極力アイデアを生かしてゆきたい。

2 夏季大会。本年も八月最終日曜日八月二十五日に母校で開催します。校外でという意見もかなりありましたが、本年はまだその時機ではなからうという事になりました。企画については思い切って若い層にまかせてみたい。

3 名簿、年会費等について。現行五年毎に発行というのを十年毎発行、中間で補助名簿を発行してはという意見や「甲陽便り」に補助名簿的な機能を持たせてはどうかという意見などもありましたが大方は現行維持に賛成でありました。ただ現在の名簿についてはかなりの不備もありますので、この点については、今後母校教職員の方々の御協力をお願いする必要がありますと思われまます。年会費については、インフレ昂進下の現在、将来の見通しは困難でありますので、今の所、現行制のまま納入数の増加に努力するのがよいであろうという意見が大勢でした。

四 四十九年度事務分担
本年度は常任理事のあいだで、次のような事務分担をして進みたいと思っておりますので、何卒よろしく。

- 1 「甲陽だより」吉井、田村、井上、勝村
- 2 会計 合田
- 3 夏季大会 中島、中村、吉井
- 4 名簿 柳原、吉井、中村
- 5 庶務 宮木、山田

なお、合田氏及び書記新山氏には各部面にわたって実務の処理をお願いしております。

(丙) 四十九年度予算

理事及び総会で下記の子算が承認されました。

収入の部

科目	予 算	摘 要
会 費	1,420,000	会 費 多 500×2,000人 入会金 多 2,000×210人
利子収入	140,000	
雑 収 入	10,000	名簿売却
繰 越 金	336,962	
計	1,906,962	

(丙) 四十八年度決算

収入の部

科 目	予 算 額	決 算 額	差 引 増 減	摘 要
会 費	1,100,000	1,190,500	90,500	入会金 436,000を含む
利子収入	140,000	138,445	- 1,555	
雑 収 入	20,000	51,000	31,000	名簿 51冊
繰 越 金	452,420	452,420		
名簿送料入受		2,940	2,940	
大会費入受		87,425	87,425	
計	1,712,420	1,922,730	210,310	

上記の外に49年以降の年会費の予納金として509,500を預っております。

支出の部

科 目	予 算 額	決 算 額	差 引 増 減	摘 要
人件費	375,000	385,000	10,000	学校事務職員・用務員への寸志15,000を含む
交通費	20,000	50,320	30,320	
需要費	25,000	17,275	- 7,725	通信費、事務雑費
会議費	100,000	83,280	- 16,720	総会、理事会、夏季大会打合会、学校及び法人との懇談会など
事業費	915,000	753,048	-161,952	甲陽便り、卒業生への記念品など
雑 費	50,000	41,190	- 8,810	光熱費、振替料、慶弔費など
予備費	227,420	220,000	- 7,420	退職諸氏への記念品代など
大会費		35,655	35,655	
次期へ繰越		336,962	336,962	
計	1,712,420	1,922,730	210,310	

上記決算に対しては、監事の監査を受け、理事会及び総会で承認を得ました。

支出の部

科 目	予 算	摘 要
人件費	450,000	2人分
交通費	30,000	
需要費	20,000	通信費、事務雑費
会議費	100,000	総会、理事会、諸打合会、学校及び法人との懇談会
事業費	910,000	甲陽便り、卒業生への記念品、夏季大会
雑 費	150,000	応援用募と旗の寄贈、振替料その他
予備費	246,962	
計	1,906,962	

会員だより

甲陽会だより

(第一回卒業生)

古稀を過ぎる年頃となると歯が抜けてゆくように欠けて来る。情けないことにもう何年こうして会えるかと云うような声を聞く。そこで最後まで友情を持ちたい念願が万一のとき独りでも多く集ることだとの結論に達して今回の議題となり、住居地を区分してその地区の責任者が各方面に連絡の責任を持つことにした。是非皆の賛同を得て実現したい。

六月八日、主として阪神地区のものと、遠く東京より土井 猛、その他遠きより吉田長敬、田川茂諸氏も参加し珍しく山口、田中両君も来られて十九名和気霽々の裡に論議したものである。

何分考えて見ると集るときは楽しいが、会が済んで別れるときは淋しい気持が生れるようになって来た、年だなどと思う。別便で同窓の住所分布と決まった事項を郵送しておきましたが賛同者の多いことを願う次第です。

それから兼ねて夫人同伴の懇親会との声がありますのでこれは次の懇親会から参加を自由にすることに決めましたので夫人同伴の参加を歓迎します。

秋には半田市の吉田長敬君のお骨折りで、東西の半ばの名古屋に集合して飛弾の高山で一泊して都会離れの朝市でも見物したいと考えています。十月五、六日の第一土曜、日曜を予定していますので今からご都合をつけて一人も多い参加を望んでいます。

泉君や沢野君の例にあるようにお互いに健康を喜んでいるときがだんだんと少なくなっているのです。お互いに音信を絶やさず参加することに意義あり自省したいものです。

(合田生)

第32回 (昭26年卒)

同窓会報告

私たちは終戦の年に入学した。従って質はともかく個性豊かなところがとりえである。それでいて結構まとまりがよい。同窓会もこれまで毎年行われている。特に三年前の二十周年には七十名が集まり、実に盛大であった。

今年度は五月二十五日に開かれた。会場は大阪北区の料亭芝苑。出席者はやや低調で十七名。当日キャンセル組が数名で、きくとほとんどの者が仕事上の急用で来られなくなつたとのこと。なにしろ働き盛りの年代なので止むをえない。

宮川先生も都合わるくおいで願えなかつたが、木村雄二郎先生は、昨年喜寿をむかえられたとは思えぬほどの元気な姿をお見せ下さった。

木村先生は毎年ご出席いただいているが、そのつど不思議に思う。学校当時の先生のイメージと現在の先生をダブらせて見るのだがあまりズレがないのだ。頭頂部に若干の変化を認める程度である。

木村先生を中心に飲む。語る。歌う。たのしい時ほど早く過ぎるもので、九時頃恒例により坪井君の美声によつてしめくくりめでたくおひらき。

帰りに木村先生がボツリと「キミねえ。ボクはいい職業をえらんだものだよ」、さんざん先生を手こざらせた元悪童どもにはこたえる言葉である。

米寿はもとより、白寿も私たちでお祝い申し上げたいものである。(前田保信記)

「甲陽36会」

去る四年十四日、われわれ昭和三十六年卒業生の親睦をはかるため、名付けて「甲陽36

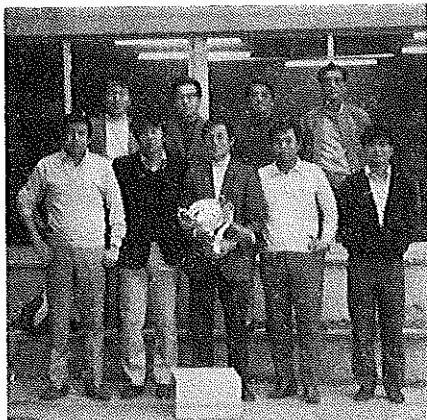
会」の第一回ゴルフ・コンペを京都大原パブリックコースで行った。

名称の由来は昭和三十六年卒業生の集りであること。ハンディー36の者が大半であることと三、六合わせて九のカブで縁起の良いことなどから「36会」と命名し、呼び方は、サンロク、サブロク、サンジュロク、ミロク、サンピンロクデナンシエTC、各自お気に召すまま呼称すればよいこととした。

当日は朝から生憎の大雨で、一同一寸気勢をそがれたものの、そこは集い来たる者、いづれ劣らぬ好き者、腕自慢ばかり、すぐにスタートへと飛び出し、雨の中の激戦(?)を繰り展げた。雨のなかでのプレーとあってスコアを崩す者が、続出したなかで、日頃の精進よく、スコアをまとめた岸勝彦が第一回のチャンピオンになり優勝カップを手にした。以下成績は宮崎清志、梅村幸彦、佐々木克義、森本正義、宮崎恒彰、大野忠雄、小玉弘、金田保夫の順となり夫々賞品を手にした。

コンペ終了後、和気あいあいのうちに、表彰式、夕食会、ハンディー決定をすませ、夫々次回に期すところ大なるものを秘め散会した。

第二回コンペは今秋の予定であり、第一回



優勝者、ブービーの岸、小玉が次回の幹事にあたることになった。参加希望者は、大野(寓)自宅0798-2211990)か第一回参加者のいずれかにご連絡下さい。回を重ねる毎に盛大にしてゆきたいと考えています。

なお、浜田雅義、馬淵理、本田武蔵、深井 猛、矢吹宏は今回は都合により参加出来なかつたが、次回からは参加します。なお、京都大原パブリックコースは沢田の経営するコースであり、色々便宜をはかってもらつた。同窓諸兄もぜひご利用下さい。(宮崎記)

住友電気工業

「甲陽会」開かれる

74年度の住友電気甲陽会が、去る五月十四日(火)本年四月入社の中山、磯崎両君の歓迎会を兼ね、大阪の住友クラブで開かれた。当日は、母校より恩師中島久先生にもお越し頂き、計十一名が出席した。

住友電工の甲陽会は、中村悖二先輩(昭和35年卒)の尽力により昨年度初めて開かれたもので、本年は、中山、磯崎両君を迎えてメンバーも二〇人の大台に達し、甲陽生には乳離れの悪い者が多いことから考えて、今後とも増加の一途をたどることが期待(?)されている。会社内には、大学の同窓会は数多く存在するが、高等学校の同窓会はめづらしいのではないだろうか。

十四日は、事実上の発起人である中村先輩が現在横浜勤務であり、元応援団長の川淵秀和先輩(昭和38年卒)が仕事の都合というこゝとで、後者二人が欠席であったために少々さびしくはあったが、久し振りに独特の中島調の話しを伺い、また、先生からは「高等学校の移転計画」と言ったニュースも聞かせて頂く等して、またたく間に予定の時間が過ぎ、最後に学院歌を大合唱して散会した。

当日出席は次の通りである。()内は卒業年
中島久先生、小松啓七(34) 西園寺幸夫
(37) 中田秀一(38) 藤田安臣(38) 吉井明

夫(40) 蝶名林利彦(41) 飛岡正明(41) 大塚昭(42) 中山平敏(44) 磯嶋茂樹(45)
(以上 大塚記)

草創期の追憶 (上)

(二回生) 金 谷 熊 雄

追 憶

大正七年といえ、今から五十五年前のことだ。梅田新道を出た一輛の阪神電車が、尼崎、西宮を過ぎ、御影を経て三宮瀧道を一時閑余りの速力で走ったところである。当時では、阪神間を結ぶ唯一の電気鉄道で、私たちはこの足をかりて東は、大阪、伊丹、高槻、豊中、西は神戸、明石あたりから甲陽間に集ってきた。寄宿舎に入った人たちは、阪神間居住の人を除いて、なかには長時間の通学路を、よくも歩き、よくも通ったものだと思う人さえある。

五十五年前の学園とその周辺

今津(現久寿川)の停留所に降りた少年は入学願書を手にして線路を横断した。こんもりとした松の喬木樹に囲まれて常源寺の屋根を見上げた。馬力車が往来できるほどの道が南に通じ、向うに長部の酒倉の白壁が映えて見えた。左手に線路に沿うて行くと、まもなく久寿川に突き当たる。川といってもせいぜい六米あるかないかの小川、土橋を渡ると、小じんまりとして住宅が左右に並び、緑の植込みが塀のうしろからぞいでいる。はずれは道の片方に二階建の長屋が四、五軒つづいて、左手に甲陽の校舎が見える。桐と桐のあいだに、植えて間もない、いばらが、まばらに小さな葉をひろげて陽をいばいにうけ、その垣根は枝川の土手まで続いて松並木のなかに隠れていた。少年は正門に立って「私立甲陽中

学」の表札をじっと見て、なかを窺った。ひっそりとした校門から女関をはいると、右手が事務所で、赤銅の眼鏡をかけた五十才を越えていられた、十七八才と思える女事務員が少年の姿を見ると窓口をきいて、少年のさし出す願書を受取って、受験票をくれた。

入学試験は国語と算術で、算術は四則と利息算で難しくはなかったが、国語には成申詔書の文句が出て尋常科では習わなかったから解釈のしようがなく困ってしまった。第二日は身体検査と口頭試験があった。このとき試験をせられたのが伊賀校長であった。風色の詰襟の服を召されて新校舎のグラウンドの教室に机を前にして坐っていられた。少年は胸をドキドキさせながら答えた。肉づきのよい五十がらみのどつしりした、まるでいぶし銀のような莊重さをもたれた先生からの問はふたつ、家族関係と住所。

入学してから楽しい場所は給品部だった。本館の女関を入ると右側が事務所、左側が校長室で、給品部の部屋は事務室の隣で、その隣が職員室、左手の校長室の隣りが理科準備室と理科室で階上は四教室に分れ、そのうちの三教室は、教室と教室の戸をはずすと、そのまた講堂になり、学芸会場になった。ここでフライ・ビンズ会が催された。

室があった、教室にはいるときはこの脱靴室に靴とゲートルとを脱いで箱におさめ上靴をはいて上った。校舎の北側はコンクリートの遊歩場で藤の棚があり、さつきが植えてあった。

たしかその当時すでに雨天体操場が建てていたと思う。西側に教壇があって、その両側の壁面に井上圓了博士の「不動如山」と「櫻桃梅李一時の春」の大額が掲げていた。ここが剣道の道場でもあった。その横に柔道場があった。この二つの額がそのまま甲陽の教育の方針で、伊賀校長の、おいては私たちの理想だったと思っただけ、それから遙か後のことだったとして、当時としてはあの伊賀校長の動静を通して不動の信念を直視したにすぎない。櫻桃梅李一時の春は、今日振り返って見ると当時草創期における教育の実際の端はしに窺えた。入学後一学期終ると間もなく、クラスを成績順に分けて学力相応に授業を進めようとする意図のなかにも見られたが、これは辛になにかの方便ではなく、教育の目的と方



便とが相即した行き方であった。百花燎爛を手にしようとの意図であった。それはまたフライ・ビンズの会にも見られた。当時劇一主義のもとに教育されてきた生徒が自由に潤達に、自己表現の機会を与えられても、表現の方法を知らなかったらどうなかにその方向付けへの機会であった。校長の修身の時間も生徒のなから湧き出る驚異の眼を啓発されることに努められたようであるが、生徒の方の機がととのっていないようであった。廣瀬淡窓の「君は薪を拾え、われ水を汲まん」の親和、親睦への機会でもあった。

草創時代というものは、なにもかも混然一体となっていて、そのなから必要に応じてひとつひとつ処理されて行くものらしい。運動場は四百人足らずの生徒がどんなに走り廻っても不自由を知らなかった。そこへ、もつと楽しい枝川の堤があり、松林があり、流れがあり、少年の心は無限のなかに包まれていた。

運動場の一角、東北の隅に池があり、その南に遊病舎が松林の蔭にひっそり静まっていた。線路添いに若木のユーカリが間隔を置いて植え込まれ、まばらな葉をつけていた。西側には平屋の職員住宅が三棟ほど並んで南の端が校長住宅であった。やがて寄宿舎ができて、寄宿生は鳴尾からここに移った。運動場といえは全くの砂地で、隅っこには雑草が生い繁った。この砂地のうえでの競走はとてむつらかった。踏めばザクザクと足がめり込んで上げる足が重かった。ここで一分間競走の競技に参加したことがあったが、とてもえらかった。

それにしても運動場から仰ぎ見る六甲の山々は四季毎に色を変え、美しく、また雄大だった。夕やけの六甲は美しかった。お多福山の春まだきのエメラルド・グリーンに輝く美観に気づいたのもそのころだった。夏の今津の浜での水泳訓練は、校舎から浜までの草い

されする一キロに余る歩行もあってつらかつた。

昼の休憩時には、三々五々弁当をもって枝川の堤に出た。樹上で食べているもの、猫やなぎの芽のふきでている水際の芝の上に並んでたべているもの、歩きもってやっているものさまざまである。枝川の鉄橋沿いの流れは深くよどんでいて、一面に竹やぶの簇生しているところがあった。竹を切ってあゆを突く者もいた。まことに応援歌の「山紫に、水澄みて、夏は緑の蔭清い」甲陽学園のたたずまいであった。

草創時の先生方

教育は人にあるとは千古の金言である。人なくしては、いかに環境がよくても創造は遅々たるものにならう。ここで甲陽の草深いころの諸先生のプロフィールを描いて見るのも意味なしとはいえなからう。

凡そ草創期の人々といえは、校長を中心として人格的に構成され、極めて主体的である。自由である。積極的である。功利的でない、受動的ではない、規則がないところに自ら規則がある。生徒は無意識のなかに目ざとくそれを直観する。頭ではない心情であり、直覚力である。先生は東大出であるが、高師出であるが、師範出であるがそんなこととはどうでもよい。直接に触れて育ち、間接に知って発奮する。

大森先生は女先生で英語の担任だった。色のすなりとした上背の婦人で、節度があった。妙に英語流のアクセントをつけて名を呼ばれた。およそ発音をやかましく言うこともなく、自然に慣れるものとして取扱われた。隣の組の生徒が鏡に向いてVやF、LやRの発音をさせられたそうだが、先生のクラスはむつかしいこと一切抜き、ナイーブな少年たちに暗誦するとはなしに暗誦させられたようだった。考えて見るとあの単調な初歩の英語を教えることはうんざりするものであった

ろうと思える。書き取りの時間にリーダーを前に開けたまま、気がつかないで書いていた少年が、先生に追試験を願ったとき、一かけらも疑いのまなざしを向けなくて、いたわるように答案を受け取られたとき、少年はなんと感激したことだろうか。教育は信頼によって成り立つ。これには日頃の観察が行き届いているか、どうかである。その少年が英語が好きになったのは道理もないことである。大森先生は後任の野田先生が就任せられると間もなく、姿を消された。枝川の堤をミス・スタイルと目傘をさしながら散策される姿は少年の心によけつけほど美しかった。(以下次号につづく)

二人の死

今年になって若い二人の卒業生がなくなられた。ご家族から訃報をおききた時、私達はいままでの間が耳を疑い、どうしても信じるのが出来なかった。

ひとり昭和三十七年に卒業した田中聖一氏(四十三回生)で死因は肝臓癌。さる五月二十二日午前三時のことで享年三十才であった。氏は宝塚第一小学校から甲陽に入学、在学中は卓球部に属し活躍、東京大学に進学されてからはポルト部に席をおいたこともある。明朗活潑な好青年であった。東大法学部在学中に司法官試験に合格、司法修習生を経て東京地裁、名古屋地裁で検事として敏腕をふるい、今年四月より神戸地方検察庁、尼崎支部に転勤され、主として公害関係を担当、年内にドイツへ留学することが内定していた。田中家としてはひとり子であっただけに文字通り前途を窺望されていただけに何としても無念なことである。

いまひとり昭和二十五年に卒業された菅原一雄氏(三十一回生)である。氏は戦後学

制混乱期に在学中、水泳部、軟式庭球部の再建に努力され同志社大学経済学部に進学された後もスポーツ万能選手として活躍された。十数年前宝産業株式会社を創立し代表取締役として、とくに不動産部門に力を入れ発展をとげてこられたが、さる六月五日夕刻心臓マヒで急死された。享年四十二才。氏には三人の男の子がおられるが長男康雄君は今春甲陽高校を卒業したばかりで、氏は生前親子そろって夏の同窓会の大会に出席出来る目を楽しみにしておられたという。全く痛恨の至りである。ここにおふたりのご冥福を謹んで祈るばかりである。(中島記)

遺族の住所

田中 一二 宝塚市逆瀬川町一丁目2-3
菅原 康雄 芦屋市岩園町6-10

陸上競技部より

現部員11名、対峙決定期戦をめざして各種目がんばっています。月曜日から水曜日までは顧問の勝村先生の指導の下に練習しています。今シーズンの成績は、全体的にみて今までの所あまりよくありませんが、三年の村山が四百米でコンスタントに五十三秒台を出して好調です。村山は市内大会、県私学とも2位で、インターハイ(県大会)では準決まで進みました。又、二年の白木が円盤投げで三十米台を投げています。四百米リレーは、二年生のチームで四十六と七秒という所です。なお、対峙新高校定期戦を七月二十一日(日)、午後から県営尼崎陸上競技場に於て行ないます。諸先輩の応援をお願い致します。

なお、今年本校が当番ですので、特に若手先輩の方々御多忙中とは思いますが当日の審判をよろしくお願い致します。(主将 2D広瀬)

計 報

本田久二郎(第一回卒)

昭和三十七年十二月四日胸ガンにて逝去、御夫人が同窓に知らずと音信が絶えて淋しくなるので未報告であつたらしい。当時小学校の三年であった娘さんが大学を卒業せられて何時までもご迷惑をかけてはとのこととで通知がありました。

浜野 真(第一回)

慈恵医大を卒業せられ山陰線和田山駅前にて開業せられていましたが去る三月二十八日亡くなられた由を子息晶平氏より通知がありました。四十三年二月の会合に卒業以来初めて顔を見せられたのが深く印象に残っています。

編集 後 記

◇ 何と言っても本号の庄巻は、金谷氏の甲陽草創期の物語りでしよう。老いたる人々(?)には懐かしく、若い我々には興味の尽きぬ作品です。かなりの長文ですので上・下二回にわけて連載することにしました。次号を御期待下さい。

◇ 原会長の一文とあわせ読みますと、思いは甲陽「太古の時代」にまで至り、一つの疑問が、起り来たるのです。「歴史はくり返すのか、それとも歴史の流れは何人にも止めえぬ一度限りのものなのか」と。

◇ とは言え、今回は残念ながら、まだまだ「多彩」な紙面とまでは行きませんでした。写真、デッサン、詩歌等何なりと送って下さい。なれぬ編集の仕事でしたので、御不満の点批判すべき所、多々あるかと存じます。どうぞ遠慮なく御指摘下さい。